
日食の見える病室

十奥海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日食の見える病室

【Nコード】

N8584Z

【作者名】

十奥海

【あらすじ】

心疾患の人たちが集められる病院の5階。

その501号室で、高蒔 蒼也と雪森 恋は出会った。

恋は入院初日から病院を出たい、といい始めそこから物語がはじまる。

序(前書き)

しよっぱなから、残酷描写なのでご注意

序

家族三人がそろって俺たちはリビングに立っていた。椅子に座っているのはお袋だけ。そのお袋は力なく首が横に倒れ腕も椅子の腕かけに乗せてあるがピクリと動く様子もない。

親父は言った。

「すまない……すまない……」

お袋の座っている椅子に崩れるようにひざをつき静かに謝りの言葉を放ち続けていた。

「なにが……起きたんだよ。なあ、親父？」

俺はさっきまでリビングのソファーに寝転がって寝ていたからまったく何が起きたかわからない。だが、ひとつわかる事がある。

お袋の顔は原型がわからないほどに凹んでいて、血が止まらない。いつからその血が流れているのかわからないが、まだ止まる様子がない。

お袋は死んだんだ。

「俺が……」

親父はそういつて止まってしまった。

「親父が……やったのか？」

「……ああ。俺が全部やったんだ！」

大きな声で親父は断言した……

序（後書き）

この後からストーリーが始まります

脱走少女との邂逅（前書き）

実質ストーリーはここから始まる感じですよ

脱走少女との邂逅

……眠りからだんだんと覚めてくる。目を開けると明るい蛍光灯の光が目にしみる。

「夢か……」

嫌な昔の夢を見て寝覚めが最悪だ。体も汗で濡れて気持ちが悪い。周りを見ると自分がいる場所が家ではないことを思い出した。

俺はここ最近、俺は二カ月ほど入院生活を送っているんだ。昔からよく入院をすることのある俺だったがこんなに長いのは初めてだ。ここには、知り合いもいるし別に入院が嫌というわけでもないのだが。

長い入院生活何があるか分からないもので、3日前ほどに同じ病室のじいさんが亡くなった。よく話してた分悲しみもまた大きかった。このときだけは入院生活を嫌ったものだ。入院していたら葬式にも出てやれない。

横を見ると既に荷物が片付けられ新しい入院患者の受け入れ準備が完了している。俺の収納箱の上にはじいさんからもらった、花弁が一枚しか付いていない造花が飾られている。

「俺の命はこの花弁が落ちた時、ねえ……落ちる訳ねえじゃねえか、はは」

前にじいさんと話していたこと思い出して一人で笑う。

ふと、病室の外が騒がしくなっているのに気づいた。

「放せ！私は元気いっぱいだ！入院なんてしてたまるか！」

よくいる入院を嫌がる子供だろうか。子供というのは病院を毛嫌いすることがある。俺も昔は嫌いだっただから、初めて入院と聞いた時は恐ろしくてたまらなかつた。

「お嬢様暴れないでください。旦那様からきちんと療養させるようにと仰せつかっておりますので、どうか言うことを聞いてください」
どっかの御令嬢なのか執事らしき人が引っ張ってきている感じに

もめている。

「嫌だ！私は元気だから入院なんてしなくていいの！そう、お父さんに・・・」

ボタン

言葉の途中で倒れ込む少女。無理をするからそうなるんだ。

「お嬢様！大丈夫でございますか？やはりちゃんとお休みになられなければ」

「ふぁ・・・もういいわ。501号室。私の病室はここだったかしら」

力ない声をもらして、少女は俺の病室の前で病室番号を確認していた。こいつが新しい入院患者か。

「そうですね。では入りましょう」

ガラガラガラ

大きな荷物を執事持たせて入ってくる少女と執事。扉越しで声でしか判断していなかったが、実際少女を見てみると意外に年が近そうだった。声だけなら小学生かなんかと間違えるくらい幼いのに。執事の方は声の印象通りガタイの良い男だった。

病室に入って目に入ってきたのはどうやら俺らしく、じっと二人に見つめられた。

「あ、ども、相部屋の高時です」

「こんにちは、今日からお嬢様がお世話になります。こちらお嬢様の雪守 恋様です」

「よろしくつ、とりあえず早く荷物を片づけちゃいませよ秋津」

「はいお嬢様」

そう言っって少女は布団に座ってただ見ているだけだった。執事の方は大きなキャリアケースからいろいろなものを取り出して収納箱の中にどんどんしまっていく。ときぱきと、荷物が収納箱に入っていく様子を見るとこれぞ執事の仕事つと言った感じだろうか。そして、最後には収納箱の上にスタンド照明を置いて準備完了。時間にして2、3分だろうか。

これが執事ってやつかー。なんか、想像していたまんまだな。

「ではお嬢様、わたくしは旦那様に報告をしまいたしますのであ
とは、ご自由にしていてください」

「ありがとう、あとお父さんに馬鹿野郎って伝えておいて」

「かしこまりました」

そこ普通に了承するんだ。なんかフォローしろよ執事。

「じゃあねえ」

そして、執事は少女に見送られ去って行った。

二人きりになって思ったが、こんなタイプの間人を見たこと無か
つたからなんて切り出そうか迷ってしまう。だが、相部屋だしなん
か少しくらい話しておかないと、後で無言が続く地獄の様な空間が
生まれそうで怖いし。

そんな事を考えながら、横をちらつと見てみるとすぐ目の前に少
女は立っていた。

「うわあ！」

黒く長い髪を黒いリボンでツインテールにしているリボンがあま
り目立っていないのが特徴的な少女が居た。

「何びっくりしてんのよ。失礼しちゃうわ。ねえ、あんたここに来
てどのくらい経つの？」

「俺か？俺は今二カ月ちょいってところだな。たしか、雪守恋つ
たか？」

「そうよ、恋って呼び捨てにしちゃってかまわないわ」

「そう言いつつ、恋は見舞いに来た人が座る椅子に座る。」

「恋は、やっぱり心疾患でここに来たんだよな？」

すると恋はきよんとした顔をして訪ねてきた。

「なんで知ってるの？あんた私のストーカー？」

「なんで俺が知らない女のストーカーなんてしなきゃいけないんだ
よ。ここの病棟は皆心疾患の患者が集められてるんだ。だから隣の
病室も同じだぜ」

「へえ、まあなんだっていいわ。私この病院からさっさと出たい

の！」

恋は身を乗り出して俺に迫ってきた。案外近くでみるとかわいいな・・・じゃなくて

「は？・・・さっき倒れてたじゃねえかよ。一日ぐらいここに居たっていいじゃねえか」

「別に一日ぐらいいてもいいんだけど。それじゃあやる気が無くなっちゃうそうでやだ！あんたも手伝って！」

「俺はあんたじゃなくて高時 蒼也だ。蒼也って呼んでくれて構わないからちゃんと名前だよべ」

「別に名前なんてどうでもいいのよ。私はここから出たいの蒼也！なんだか面倒だな。」

「出たいなら、そのまま外に出ればいいじゃねえか」

「ダメなの！さっき見たいな執事が見張っててでれないのよ」

しょんぼりと、椅子に座りなおす恋。しかし、そこまで見張られるって何したんだこいつは。

「なんでそんなんに俺が付き合わなきゃいけないんだよ。捕まる時は俺が居たっていなくておんなじだよ。ま、俺らの病棟は外出禁止だからまず他の看護婦とかに捕まる可能性もあるけどな」

「えー！何それ聞いてないよ！」

「ちゃんと人の話は聞いとけよ、ここ来る前に説明受けてるだろ。恋の付けてるその腕輪の色みたら素晴らしい笑顔で看護婦か誰かに止められるぜ」

恋の腕輪を指を指す。まったく腕輪の意味を知らなかったのか呆けた顔をして自分の腕輪を見ていた。ちなみに、俺らの腕輪の色は黄色。

「はあー、もうどうやってたら出れるのよ！」

「だから、俺らはそんだけ危ない状態にあるってことなんだよ。おとなしく寝とけ」

「むうー、しょうがないわね・・・じゃ、食堂行きましょ」

この病院には、食堂が用意されている。動けない患者以外はそこ

で食べるように義務付けられている。最低限食事ぐらいは移動して食べさせなければ、まったく動こうとしない患者もいるらしく、そういう方針にしたらしい。バリエーションも多めで結構充実した病院食が食べれて人気も高いらしい。

「・・・暇だし、そんなくらは付きあつてやるよ」

なんだか、ペースを持ってかれてるな。

俺たちは、食堂へ向かった。

脱走少女との邂逅（後書き）

こんな奴病室に来たら、めんどくさそうだけど面白そうだよな〜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8584z/>

日食の見える病室

2011年12月27日00時52分発行